


ソルゲ＝大田副
通訳文庫より
(国立国会図書館蔵)

旧司法省幹部手控え発見

ソルゲ事件報道統制文書

「4段組み以下、写真なし」

本記事は戦前戦中に発見した、20世紀最大の国際スパイ事件「ソルゲ事件」を巡り、当時の司法省などが報道を厳しく規制した「新聞記事掲載要領」や、関係各省と発表の文書・公開範囲を折衝していた内部文書が見つかった。ソ連のスパイ網が国家の中核にまで伸びていたことが判明する中、各省が都合の悪い表現を削除し、また事件の重大性の矮小化を図るなど、政府の思惑や、対メディア戦略が記されている。ソルゲ事件の1次資料を集めた「現代史資料」（みすず書房）に未掲載のものも含まれる一冊資料だ。

資料は事件当時、関係事件などを担当した司法省刑事部第6課の職員だった太田副（1903〜50年）が残したもの。関係者が国立国会図書館（東京都千代田区）の資料室に寄贈した。

トップ段組ノ特種機密ヲ為サザルコトノハ四段組以下ノ取扱いヲ為スコトノハ写真ヲ掲載セザルコトノハソルゲらスパイ網が逮捕されたのは41年10月。翌42年5月16日、司法省が事件

ソ連赤軍に所属しながら駐日ドイツ大使館裏庭を潜り、ソ連に日本の機密情報を渡したスパイ容疑で逮捕された事件。首相を務めた近衛文相のブレーンで、元朝日新聞記者でもあった尾崎秀実（はつみ）らの助力を得た。ソルゲらの逮捕は1941年10月、新しい報道統制が敷かれた。検挙人数は計35人にのぼり「日本近現代史上最大のスパイ事件」とも呼ばれる。

「重要機密事項の重要」という形容詞を添える必要があるのでは「など」とあった。西園寺公一は首相なるを兼ねた元老、西園寺公麿の弟、司法省の発表は「いすれの意見も反映されている」。

翌17日の東京毎日新聞（現・毎日新聞）は、2面「国際諜報網」を掲載し、

「国際諜報網を檢舉
首謀者内外人五名起訴」

ソルゲ事件を報じた、1942年5月17日付東京毎日新聞2面。4段組み、写真を掲載しないなど政府の機密保持の意となっていた。

「国家の隠蔽警鐘」

（尾崎秀実とソルゲ事件）

（吉川公三）の著書がある太田副は、東海大名誉教授の太田副は、ソルゲ事件で、新美への統制が具体的になったのは初めてではないか。西園寺の調停を断じたのは、外務省が責任を逃れるためだろう。国家は重大な事件において、事実を隠蔽し、人々に誤解を招くことがよく分かった。その責任を明らかにする必要がある。



8月18日(土)
2018年(平成30年)
発行所：東京千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-6021
毎日新聞東京本社



NEWSLINE

伝統色で五輪彩る 18



東京五輪・パラリンピックの装飾デザイン例を公表。日本の伝統色の「藍」「紅」など5色を活用した。

日本でも規制探る 2

増殖は17日、プラスチックの使用削減などを検討する委員会を初開催。委員からは国の規制を促す意見も。

優先バス デジタル化検討 4

東京ディズニーリゾートはアトラクションに優先入場できる「ファストパス」のデジタル化を検討する。

不正ワクチン 42人処分 6

習近平氏一共同一中国指導部は不正ワクチン事件で責任者ら42人の処分を決定。国民の批判をかわすまいか。

韓国風メイク 10代に人気 13

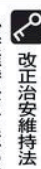
小中学生の時から化粧をする10代の女子が目立ってきた。韓国風の「オルチャン」メイクが人気になっている。

根柢から機密な人無しとてだが、世には機密をなす人も人にも幸運というもある。記述にも「裏に船」から見た「二重の船」とし「大船の木」……しめたう機関はある▲思いがけないという「もったいの幸い」のも「勿論」または「無難」もののけのことという。つまんないかのしわざとしか思えなような態度をいうのだが、それが通ずるあつては機密な人はたまらない▲大船の真田林知照されていて逃走した機密すれば、まさに「もったい」なうて選がしてはいたか。こののけ、その正体は機密の機めよな手取りと機密に

戦時「思想検事」の秘蔵文書

故太田耐造氏 ゴルゲ事件捜査

元司法省幹部、太田耐造氏（1903〜56）。戦時下の統制に大きな役割を果たした一人の「思想検事」だ。その所蔵文書を国立国会図書館が公開し、近現代史の研究者から注目を集めている。治安維持法改正の過程や「ゾルゲ事件」の資料も含まれ、通説が書き換えられる可能性もある。



改正治安維持法
治安維持法は41年の改正で厳罰化と取り締まり対象の拡大がさらに進んだ。刑期が満了しても再犯の恐れがあるとされれば身柄の拘束が続けられる「予防拘禁制度」が設けられ、同法違反の被告人には三審制が否定されるなど、取り締まりの側面に著しく不利な刑事手続も導入された。

情報統制の「代表格」1104点公開



②「太田耐造関係文書」の一部。「秘密」「極秘」の印があるものも多い＝国立国会図書館蔵
③旧満州国の司法部刑事司長だった頃の太田耐造氏＝1942年10月19日、「太田耐造追想集」から

太田氏は戦前の検察官。39年1月、司法省刑事局で思想問題を担当する第6課長に就任した。41年の治安維持法改正に中心的な役割を果たし、日本の南進政策などの極秘情報を旧ソ連へ送ったスパイ、リヒャルト・ゾルゲの捜査にも関わった。敗戦後に甲府地裁検事正となったが、公職を追放されて弁護士を開業。56年3月16日、静岡地裁で刑事訴訟の公判中に心臓発作で倒れ、5日後死去した。17回忌を機に有志が編んだ追想録には、元同僚や後輩による「逸材中の逸材」「その行動は強烈」といった言葉が並ぶ。司法省刑事局で太田氏の後任となり、戦後に検事総長を務めた井本吉氏は、「主に陸軍でしたが、軍人さんを完全に手なすけて、自分の言うように使った形跡がある」と回顧している。

研究者「新事実の可能性」

文書には統制側の考えや動向を窺うものも多く、「秘密」や「極秘」と記されたものも多い。例えば41年8月、第3次近衛内閣で閣議だった平沼騏一郎が右翼活動家に銃撃され、重傷を負った事件の資料、鉛筆で教えたことについて書かれているのは、今後の方針だ。重臣暗殺など

た情報戦や諜報活動に詳しい加藤哲郎・一橋大学名誉教授は「情報統制の全貌を統括していた『思想検事』の代表格と言える人物」と話す。太田氏は作成したり回顧



1927年	3月	東京帝国大学法学部を卒業
28年	12月	検事に任命
31年	9月	満州事変
32年	5月	5・15事件、犬養毅首相射殺される
33年	7月	右翼クーデター未遂、神井隊事件が発覚
36年	2月	2・26事件、首都中樞を反乱軍が占拠①
37年	7月	盧溝橋事件、日中戦争始まる
39年	1月	司法省刑事局第6課長に
	9月	欧州で第2次世界大戦が始まる
41年	3月	治安維持法の改正
	10月	スパイ容疑でゾルゲ②、尾崎秀実ら逮捕
	12月	対米英開戦
42年	9月	旧満州国司法部④刑事司長に
44年	11月	ゾルゲと尾崎秀実、処刑される
	12月	帰国して大審院検事に
45年	4月	司法省大臣官房会計課長に
	8月	敗戦
46年	2月	甲府地裁検事正に
	5月	極東国際軍事裁判（東京裁判）開廷
	8月	弁護士登録
	11月	日本国憲法公布
47年	5月	日本国憲法施行
56年	3月	静岡地裁の公判中に倒れ、死去

太田耐造氏の経歴と主な出来事

の共謀行為を「包括的に処罰し得る如き特別規定」の必要を感じ、「至急立案の方針」と記しており、さらに取り締まり強化を考えていたことがうかがえる。また、「臨時郵便取締令（緊急勅令）案」と題した極秘文書は、戦時下個人への封書の検閲や差し止めが可能にする条文案だ。欄外

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

ゾルゲ事件「上奏文」の文案 司法省の指揮など明らかに

ゾルゲ事件 ドイツの新聞特派員として来日したゾルゲ（1895〜1944年）が8年にわたって国家機密を手に入っていたとして1941年に逮捕され、後に処刑された事件。尾崎秀実・元朝日新聞記者ら、多くの協力者も検挙された。

2年5月13日に報告された「上奏文」の原案（5月9日付）と、最終案（同11日付）。思想犯を取り締まる「思想検事」として知られる太田耐造の所蔵資料で、2017年に公開された中に含まれていた。文案は、情報戦に詳しい一橋大の加藤哲郎名誉教授が、先行行われた研究会で発表した。ゾルゲらが入手した主な情報として、対ソ戦ではなく南進優先の国策を決めた御前会議（41年7月2日）の内容など7項目を挙げている。この国策がソ連に伝わっていたため、天皇に報告されたことになったが、原案には記されていない情報提供者の名前が、最終案では伏せられていた。名前を明記すると、ゾルゲらが陸軍中堅などから幅広く情報を得ていることが明らかになり、責任問題に発展する恐れがあることなど理由とみられるという。さらに、昭和天皇への報告後の42年5月16日に報道機関に向けて発表された文書も見つかった。これまで、ゾルゲ事件に関する基礎資料は、特高警察などを所管する内務省警保局の文書が中心だったが、司法省が捜査の全体的な指揮をとったと明記。陸軍憲兵隊や外務省、内閣情報部もほとんども関与できていなかった実感が明らかになった。加藤名誉教授は「戦前日本の『インテリジェンス・コミュニティ』の多頭制を示す、第一級の資料だ」と話している。

太平洋戦争の直前に摘発されたゾルゲ事件の「上奏文」の文案を、司法大臣が昭和天皇に対し報告した上奏文などの文案や、報道発表文などが見つかった。当時の捜査や取り調べ、報道発表を担ったのが、司法省だったことがうかがえる。専門家は、非常に重要な資料だと位置づけている。見つけたのは、1994

この国策がソ連に伝わっていたため、天皇に報告されたことになったが、原案には記されていない情報提供者の名前が、最終案では伏せられていた。名前を明記すると、ゾルゲらが陸軍中堅などから幅広く情報を得ていることが明らかになり、責任問題に発展する恐れがあることなど理由とみられるという。さらに、昭和天皇への報告後の42年5月16日に報道機関に向けて発表された文書も見つかった。これまで、ゾルゲ事件に関する基礎資料は、特高警察などを所管する内務省警保局の文書が中心だったが、司法省が捜査の全体的な指揮をとったと明記。陸軍憲兵隊や外務省、内閣情報部もほとんども関与できていなかった実感が明らかになった。加藤名誉教授は「戦前日本の『インテリジェンス・コミュニティ』の多頭制を示す、第一級の資料だ」と話している。

ゾルゲ事件 天皇への上奏文案

捜査 旧司法省主導の内幕記す

戦時下、日本政府の極秘情報で旧ソ連のスパイらが漏洩した「ゾルゲ事件」の概要を司法大臣が昭和天皇に報告した上奏文の文案が見つかった。「20世紀最大のスパイ事件」と後年に呼ばれた事件の捜査や公表を、旧司法省が一貫して主導した内幕が記されていた。報告内容が当局の都合に合わせて添削される過程もうかがえ、研究者は第一級の重要資料としている。



ゾルゲ事件

旧ソ連軍諜報員リヒャルト・ゾルゲ＝写真＝らによるスパイ事件。ドイツ紙特派員として在日ドイツ大使館と深い関係を結んだゾルゲは、近衛文麿首相のブレーンで満鉄嘱託だった尾崎秀実らの協力を受け、独ソ戦開始や同時期に決まった日本軍の南進政策など政権中枢部の情報をソ連へ送った。ゾルゲと尾崎が1941年10月に治安維持法や軍機保護法などの違反容疑で逮捕されたほか、検挙者が30人を超えた。2人はロシア革命記念日だった44年11月7日に処刑された。



今回見つかったゾルゲ事件の上奏文案。1942年5月9日付の原案(右)と、同11日付の最終案—国立国会図書館所蔵

今回見つかった上奏文案は、1942年5月9日付の原案(計28頁)と同11日付の最終案(計34頁)で、いずれも冒頭部分に「厳秘」印が押されていた。政治犯の取り締まりを主導した「思想検事」太田耐造の旧蔵資料に含まれていた。司法省の取り調べ調査をはじめ事件を記述した大量の内部文書と一緒に見つかった状況から、戦時下の情報戦に詳しい加藤哲郎・一橋大学名誉教授が、実際使わ

れた資料と判断。概要は9日に都内で発表される。事件は42年5月13日、昭和天皇に報告された。「昭和天皇実録」の同日付に司法大臣から報告を受けた旨の記述がある。見つかった二

情報の出所 最終案で削除

9日付の原案では7項目それぞれに情報提供者と入手した個人名が記されていたが、11日付の最終案では所を明記するとゾルゲらが在日ドイツ大使館や陸軍幹部からも情報を得ていたことが分かった。司法省が情報提供元を把握しながら捜査できなかった実態まで、昭和天皇に説明しなければならなくなる可能性があったためとみられる。

一方で、いずれも近衛文麿内閣のブレーンで最重要機密を尾崎秀実らに漏らした西園寺公一と犬養健は、11日の最終案では別項目で詳しい説明がついた。2人とも「諜報団員」とはせず、親しかった尾崎に「情を知らずして」機密を流したとされた。加藤名誉教授は、あえて政権中枢の2人を見せしめとして公表され、起訴されたとみている。また、上奏の3日後に司法省が報道機関に向けた発表文も見つかった。発表文では、尾崎の「内閣嘱託」や西園寺の「内閣・外務省嘱託」の肩書など重要事項の多くが伏せられた。肩書の削除は事前の関係機関との調整の際、外務省が要望したためだったことが分かった。

これまで同事件の基礎資料は、戦後発掘された内務省警保局の文書が中心だった。特高警察と外事課を所管する内務省警保局はゾルゲや尾崎らの取り調べも担当していたが、今回の上奏文案では司法省が捜査の全体的な指揮をとったと明記。警保局は司法省に主導権を握られていたことが判明した。また、独自の情報網を持つ外務省や内閣の情報局もほとんど事件に関与できなかった実態が明らかになった。

加藤名誉教授は「これらの文書から、数多くの添削と他省庁との調整を経た綿密な情報統制の内幕と、摘発の経緯や事件の内容に応じて複数の情報当局で主導権が入れ替わる『多頭制』とも言える実態が示された」と指摘する。

(編集委員・永井靖)

Final report to Hirohito about Sorge spy ring hid lax oversight

Reported by National Diet Library

Print

0

[list](#)



The draft, left, and final report given to Emperor Hirohito in May 1942 about the Richard Sorge spy ring (Provided by National Diet Library)



Recently found documents presented to Emperor Hirohito about Soviet spy Richard Sorge show that facts were fudged to avoid embarrassing government agencies that seemed unaware of the potentially war-changing espionage ring operating under their noses.

In one of the largest spy scandals of the 20th century, Sorge, who worked in Tokyo as a correspondent for a German newspaper in the early 1940s, established close ties with Japanese insiders and obtained top secret military information that he passed on to Moscow.

Among the more important items dispatched from Sorge revolved around what the Japanese military would do when fighting broke out between the Soviet Union and Germany. His reports said Japan would move into Asia in the south rather than attack the Soviet Far East.

That information allowed the Soviet military to concentrate its forces on the Western Front and contributed to crucial counterattacks against the Nazis in late 1941.

A 28-page draft dated May 9, 1942, and a 34-page final version dated May 11, 1942, were found among papers stored by Taizo Ota, a prosecutor who handled political and ideological crimes.

The two "strictly confidential" reports were compiled by the Justice Ministry about half a year after Sorge was arrested

What's New

China defense chief defends policy on Hong Kong, Xinjiang

Severely disabled lawmaker asks first questions in Diet session

Haneda Airport's domestic terminals lose water supply



Recommended

Ghosn: Japan's biggest plea bargaining case

